

広島俳句倶楽部

令和四年一月作品集

蝶の庭

すみれ

私は「保育士」として働いた。仕事と好きなことが両立し、友達も得て、振り返ると良い人生を過ごしたと思う。就職する時は、働いて給料を頂き、自分で生きてゆくという決心だけだった。親から自立することがなによりの親孝行だと思いい、そのことだけが嬉しく、働く厳しさなど知る由もなかった。その第一歩を踏み出した時の喜びや不安を俳句にした。

連絡帳書けず見てゐる蝶の庭

転んでは泣く子の春の土抔ふ

風船を部屋いつばいに子の弾く

父の字で小缶届く暮春かな

五月晴子の呟きを書き留めて

帰省する便りし父母へ土産買ふ

青葉して職場に向かふ足軽し

園児らと汗だくになり散歩道

園児らを昼寝させ我居眠りす

勤務終へコーラス会へ夏の夜

《作品鑑賞》

亜矢

「蝶の庭」は、新人の保育士が詠んだかのごとく、実に瑞々しく、ひたむきさが伝わってくる作品である。

作者が昔を懐かしんで詠んだというより、かつての自分を甦らせたように思えた。

連絡帳書けず見てゐる蝶の庭

保育士なりたての頃だろうか。保護者との連絡帳に何を書いていいかわからない。蝶の舞う庭には子供はおらず、静まり返っている。作者の切ない気持ちが痛いほど伝わる。

転んでは泣く子の春の土抔ふ

幼い子たちはよく走りよく転ぶ。泣くたびに、服についた土を払ってやる作者。春への喜びにあふれた句。

勤務終へコーラス会へ夏の夜

職場に慣れ、心の余裕ができた頃か。仕事帰りのサ・クル活動。暑い夜も、コーラスをしている間は、心身ともに爽やかだったことだろう。

縮景園

秋沙

この度、特別作品を作るにあたり、私の住む牛田から徒歩で二十分ほどの縮景園を選びました。俳句を始めて以来、句村を求めては訪れ、四季折々の自然の変化に気づき、感動して俳句を詠んできた場所です。最初の句は、開園の時、守衛の方が冠木門を開けられる姿を詠んだものです。俳句に行き詰ったとき、泉水のベンチに座ると心が安らぎます。

春光や門を抜く冠木門

堰落つる水の音して春立てり

青き替のこけらの屋根に春の雨

白梅の仄かに匂ふ昼の園

夕暮の空に一輪梅の花

吾が影と重なり泳ぐあめんぼう

水の斑の揺らぐ四阿花あやめ

泉水の跳ねる真鯉や晩夏光

今日の月木立の中を昇りけり

泉水に映りてゐたる薄紅葉

《作品鑑賞》

村上正人

縮景園は広島藩主 浅野長晟が築成した大名庭園がはじまりとされるが、一年を通して四季折々の木々や花々が楽しめるので、観光客はもとより地元広島の人にもとても愛される庭園である。作品『縮景園』の中で作者の秋沙さんは四季折々の園の景を印象深く詠まれている。それにしても徒歩二十分ほどで縮景園を訪れることができるというのは羨ましい限りである。

春光や門を抜く冠木門

縮景園の正面入り口の冠木門。朝一番に門を抜く様子に開門を待ちわびた歓びが伝わってくる。季語「春光」がその歓びを的確に表現している。

水の斑の揺らぐ四阿花あやめ

作者は俳句に行き詰ったとき泉水のベンチに座る、と語られているが、四阿から眺める揺らぐ水の斑とそこに咲くあやめに心安らぐのであろう。

今日の月木立の中を昇りけり

名月が縮景園の木立の中に昇る様はなんと贅沢な瞬間であらうか。もしかすると園内からの景ではなく、川を挟んだ対岸から見た園の、木立の中を月が昇る景なのかもしれない。

佐保光俊

大樟にふれてゆきたる四日かな
様々な鳥の声聞く五日かな

村上正人

大樟を昇る朝日や大旦
苔むせる旧家の屋根の淑気かな

高尾ひとみ

初風の島へと舟を出しにけり
参道の人に初松風の吹く

秋沙

年新た病抱へて二年なり
はらからの料理持ち寄る二日かな

あざみ

四世代並びて初日拝みけり
年取らぬ姉と出会ひて初寢覚

亜矢

新年の学校の松日の差して
聞こえたる我が子の歌や初湯殿

綾乃

川土手に四五人寄りて初日待つ
看護師の確固たること花卉餅

井藤希

曾祖母の指を握れる春着の子
花供へ二日の墓所の静かなる

英一

孫の背は父を越えたりお元日
娘から手車届く年初かな

栄吉

初湯殿ミルクの甘き香りして
はんのりと酒の香のする旅初

大畑恵

古希迎へ夫と行きたる初詣
若人の箱根路走る二日はや

暁子

磔下るたびに破魔矢の鈴の鳴る
起きてこぬ家族待ちをり年の朝

すみれ

初御空庭の草木を見に出でて
子ら去りし玩具片付け三日かな

知佳子

また一羽鳥の飛び立ち初日の出
元旦の川面に鳥の集まりぬ

ちどり

藤娘の姉の羽子板床に出す
母が家の傍の祠に鏡餅

友岡紫山子

母と入り十まで数へし初湯かな
添書きに賀状仕舞ひと年賀状

雲雀

年男居て酌み交す朝の屠蘇
戸の音に飛び去りにけり初雀

ふじ女

初鶏や山の稜線金に変え
初雀吾子は山に行き留守です

松田裕子

初売りの商店街を右に逸れ
遠き子を案ずる父の初御籤

森口良樹

連れ添うて古稀迎へての初詣
初湯かな手術の痕の一つ増え

阿波久

正月もいつも通りの暮らしかな

遠藤さつき

疫病の三年目なる破魔矢買ふ

かこ

初春の窓開けてをり風の入る

上島康子

炊事場の水冷たくて年新た

紀英子

新年の山に響けるチエーンソー

熊谷ゆり子

田作をつまんで姉妹よく笑ひ

桑門わかこ

暮れ方の羽子つきの音してゐたり

新庄憲彦

不足分賀状に昭和の記念切手

高嶋絹代

早起きの夫と作りし雑煮かな

民

雲の間を上る初日が山照らす

撫子

独り居の母と語らふ二日かな

幹

人混みを避けて四日の神詣で

みさ子

初電話家族交互に声を聞き

美耶

初日影息子の背中見てをりぬ

村上理江

暁闇に船の出てゆく年始

やす保

初夢をどくとく語る八十路かな

山崎桂子

唐門に立ち礼をして年始

山野ウタ

裏藪に鳥の声する二日かな

後ろから人の声する二日月

海までの山の見えたり夕時雨

満月の照らしてゆける木の葉かな

鶉は鳴き落葉は深き朝かな

西山を東の冬日照らしたり

鴨の岸歩める人と走る人

初雪に一番星のかすみけり

一枝の雪も落とさぬ林かな

その上を霧の流るる深雪かな

倒木が遮つてゐる冬の水

佐保光俊

穂やかに夜の明けたる冬至かな

大樟の映つてゐたり冬の水

息白く輝く川を見てゐたり

セーターの毛玉取る夜の静寂しじまかな

ハイウエイ走れば晴れて冬霞

寒菊を買うて参れる父の墓

この店の酒に海鼠を噛み締むる

天心の月より雪の降りにけり

残る実^みに雪被りたる式部かな

取り落とす眼鏡が雪に埋もれたる

村上正人

見下ろして紅葉に朝日差すところ

せせらぎの兩岸に咲き石路の花

この庭のひと隅に群れ藪柑子

冬の日を返して池の波立ちぬ

青い青い空を見てゐる冬の朝

冬晴のどこかに鶉の鳴いてをり

枯草の音させながら山よる

青空が冬木の奥に広がりにぬ

松の葉の一つ一つに雪の積む

冬の日のもみぢの枝にあたりけり

高尾ひとみ

嗅ぐたびに草の実の付く子犬かな

柿の木に五つ六つの実の残る

対岸は秋の夕日に染まりけり

小春かな遙かに見ゆる安芸小富士

檸檬景潮入川に降り泣ぐ

枯葦に見え隠れして鷺一羽

連なりて漁船出てゆく冬の海

揚げ舟の舳先にとまる冬鴉

ガレージの屋根に触れたる琵琶の花

冬の滝木洩れ日のなか落ちにけり

秋沙

抱き上げて幼子に見せ初日かな

海隔て宮島見ゆる初景色

田の畔をゆつくり歩く初鴉

じやんけんで負けて泣く子と双六す

公園の日溜りにある冬の草

臘梅を一枝活けて窓に置く

隣から元旦一つもらひたる

家の上冬の満月昇り来る

海峡に停泊の船灯の凍てて

笹子鳴き日暮の道を急ぎけり

あざみ

知らぬ町歩いてるたり冬北斗

太陽光パネルの並ぶ枯木山

短日や飯炊き上がる音のして

友くれし蜜柑を入れて布かばん

制服の丈の短し霜日和

学校の廊下の見えて冬ともし

少年の涙手で拭く冬の星

小寒やお悔やみ欄に句友の名

まう一度声を聞きたし冬椿

冬の月在りし姿を目に浮べ

亜矢

店先を通れば香る冬林檎

家々に実南天あり歩きたる

集会所寄つてたかつて煤払ひ

百寿なる患者いたはり大晦日

坊主かと致留多めくりし義父の手や

粥煮えて子が根白草刻みたり

里を突つ炬燵の祖父に声かけて

階段にリハビリの人小雪降る

冬の薔薇朝な朝なに開きたり

受験子の夜具を直せる夜半かな

綾乃

橋架かる入江に冬の日の廻る

人を待つ間に見えし冬の虹

冬の園猫威嚇する鴉居て

年の瀬や珈琲豆を買ひに出る

帰り際年越蕎麦を予約する

年の暮洗車の後の雲低く

うち揃ひ母と雑煮をいただきぬ

手水舎に親と子の居てお元日

寒の入ふれてゆきたる六地藏

明日までの音戸の護し冬鷗

井藤希

母さんの役に徹して夏木蔭

見上ぐれば緑の中に柚子たわわ

アスファルト黄色に染めて公孫樹散る

山茶花に鳥の囀り競ひ合ふ

山茶花の蕾の光や赤み差し

小春日を妻と連れ立ち買出しに

風に舞ふ音のかすかに紅葉散る

冬日差し古都穂やかな佇まひ

雪の舞ふ修験者の黙三徳山

せせらぎに枝垂柳の枝のふれ

英一

電車来る降り立つ人の息白く

幾たびも回つて来たる焼芋屋

帰省子で取り合ひになる襦袢かな

着ぶくれの祖父にせがみし肩車

年越の母と娘の長話

駅前に自転車を止め初電車

熱燗に拘り多き兄と酌む

大小屋に新聞紙敷く寒の入

この路地の光は明るき冬の浜

鴨一羽細き流れを遡る

栄吉

短日の仕事帰りの月明り

山茶花の梢にめじろ鳴きにけり

庭先の万両の実のたわわなる

枯葉落つ枝に小さき芽を残し

しんしんと雪降り積もる夜の道

庭先の梢に積もり六つの花

臘梅の花なき庭の中にあり

臘梅を活けて窓辺に日のあたる

臘梅の開けば透けて香りけり

水仙の咲く庭先の静かなり

大畑恵

大根干し軒に吹きたる風の音

鶴が枝を落とせる冬木立

帰港せし船に止まりて冬鴟

落葉踏む音のしてゐる山の道

低く飛び鸞の影する冬の岸

蒲萄棚あまねく枯れて朝の雨

雪弾き返して竹のみどりかな

窓近く鳥の来てゐる年の朝

玻璃戸より日の燦燦と初句会

冬の波ときには受けて山陰路

暁子

牡蠣小屋に殻落つる音休みなし

道からは見えぬ燈台絶壁凍つ

純米とあれど安酒燗をつけ

凍豆腐くくりし藁に隙間あり

冷や飯を足す一合の新米に

云うたほど雪は降らずや休み明け

種落ちしトマト芽を吹く室の鈴

次の子はおのころしきと春コート

掌に田螺の接待通路かな

薔薇あまた風吹き抜ける交差点

新庄憲彦

切干の筵の横を通りたり

来客の肩に風花載せて来し

ドア開いて臘梅の香と風入り来

景の上の初雪を見る朝かな

初雪の積もるフロントガラス拭く

実千両切りてベッドの横に挿す

朝焼の雲うつすらと大旦

音読の夫の声する二日かな

夕暮の背山は雪に覆はれて

風花や喋り声して登校子

すみれ

石路の花通り過ぎたる友の家

悴む手手に包みては話しをり

波寄りて冬鳥寄りて日の暮るる

実千両厨に水の音続き

足元に千両の実の転がりぬ

枯枝を落とす鴉を見上げたり

臘梅を見てゐる人に会釈する

枯葦に山から風の吹き下ろす

雪催低く飛びゆく鳥の群

人声の近づいてくる冬木立

知佳子

冬の鳥熟柿の残る枝移る

鳥の来て大根畑に鳴きにけり

年賀状一言だけは母が書く

母が家に泊まりて据ゑる寒の灸

うつ伏せの母の背中に寒の灸

幼子のじつと見てゐる寒の灸

炬燵から顔だけ出してうとうとと

うたた寝を目覚めし母と葛湯飲む

大相撲母と炬燵で見てもりぬ

冬の星子に誘はれて外へ出て

ちどり

岩清水小さき注連の掛けられて

いつの間に止みし吹雪や豆腐汁

鰯捌く出刃包丁の光かな

真つ直ぐに煙る線香初灯

年変はり早小正月迎へたる

冬晴の路地の角より黒猫来

焼酎をすすきり割つて寒の水

やはらかく弧を描きたる冬の虹

田の窪み薄氷張り日を映し

ばつと咲きばてりと落つる椿かな

友岡葉山子

紅葉見るベンチの上に膝伸ばし

松飾り終へて今年の仕舞かな

大晦日家の裏まで掃きにけり

じつくりと年振り返る大晦日

列につき寒鰯買うて食べにけり

節料理皆の名を書く箸袋

御降りを戸口で払ひ客の来る

膝ついて寒の最中の畳拭く

一輪の臘梅飽かず見つめたる

石の間の水仙に日の当たりをり

雲雀

御降の玉水ビニールに飾る

年玉を袋の柄で選ぶ子ら

買初はいつでも買えるイヤホンか

初風呂は思わぬ時間になりにつけり

睨みあい目の奥を見る初鏡

初化粧娘のアイライナー借りる

暁光に初弓の子ら雪にまっ

暗闇の雪見また一人消えていく

兄弟が狂う深夜の雪合戦

雪晴に山も空も子も高し

ふじ女

裸木の枝から枝へ雲流れ

寒風に音のしてゐる並木かな

吾が上を羽ばたいてゆき寒鴉

家々のアンテナの影冬夕焼

日当たりの良き窓に置き室の花

ガード下の店の灯りや去年今年

二丁目の家々に差し初明り

貨物船御慶の汽笛ひびかせて

初詣幼さ残る巫女の居て

初空を奪の大きく巡りたる

松田裕子

通勤の道は冬木立を抜けて

七五三龍の手水で手を洗ひ

鉄塔の一つ立ちたる枯木山

一行の手書係へたる年賀状

山頂へ朝日見に行く息白し

ぬかるみに靴跡残る枯野道

寒苗間近に夜の闇ありて

冬の星高速バスのひた走る

ひと匙の葛湯を運ぶ母の口

大寒の日差の縁に座してをり

森口良樹

甘藷ふかす間見てゐる相撲かな

鉢植に湯たんぼの水注ぎたる

雪降つてうすうすと月ありにけり

冬鹿の水を見てゐる干潟かな

沓脱に影を作りて餅の花

交代で撮りて家族の初写真

羽子つきの音のしてゐる曲り角

鹿の来て畑に遊べる二月かな

あちこちを土でよごして苗木植う

桑門わかこ

山茶花の古き木のあり菩提寺は

短日や日は揺らぎつ海に入り

水脈引いて船の行き交ふ冬の晴

女子会の締めに啜りて小豆粥

四方に山迫る故郷冬の星

泉邸の馬場跡に咲き水仙花

川の音どこか遠うて春近し

探梅はかつて園児と来たる道

校線をゆけば木の芽に日の差せる

山野ウタ

雲が影丸く落として山眠る

初雪に両手を伸ばす異邦人

書きし文字指でたどりて日記果つ

鐘の音の耳に残りて初昔

霊峰の画に始まりて初暦

頬赤く童の走るとんどかな

三弦の稍古帰りの枯木星

村上理江

歳の隅朝日を受けて藪柑子

藪柑子一羽の鳥の近づきぬ

書院棚はのかに見えて初明り

墓所とほり古き祠へ初詣

鈴鳴らし破魔矢を握り孫の来る

冬空に電車の音のよく響く

美耶

友を待つ東京駅に雪の降る

雪を載せホームに電車入り来る

橙の色鮮やかに注連飾る

初雀二羽絡み合ひ飛び立てり

古き堀越えて臘梅香りけり

撫子

寒肥をやりて凍てつく山の寺

冬草を踏みしめてみる靴の光

水仙の花いつばいの鍼灸院

血圧をノートに記し春を待つ

紀英子

積雪をまづは話題に奥出雲

柏手を大きく打つて年迎ふ

高き枝たわめて結ぶ初御籤

幼子のいちごの歌留多押さへたる

熊谷ゆり子

仏壇の夫の微笑み去年今年

初苗ビルの間に富士見えて

七草の雛子の中の父の声

川舟の炬燵に入り川下る

高嶋絹代

参列の後ろに聞いて除夜の鐘

手を合はす社の上に初雀

初鴉信子機へと飛び移る

上島康子

幼子の石段上り初詣

初旅は旧友の居る鎌倉へ

遠藤さつき

古寺の石段上り初詣

花屋では春の花々咲いてをり

かこ

元日の一番電車軋み行く

大根を切る音ひびく厨かな

民

窓越しに雪の降りだす気配して

風花を掴まんとする赤子かな

幹

窓際に白湯をすすりて冬の月

窓越しのオリオン夫に知らせたり

みさ子

初電車まばらな席の静かなる

松過ぎてはつと一息目の暮るる

やす保

牡蠣を焼く夫の軍手に汁こぼる

御守をいくつも買うて初詣

山崎桂子

しんしんと外は白い雪の夜

阿波久

令和三年十二月度作品集より

松田裕子 私の選んだ十句

葉を落すその木と吾は語るなり	佐保光俊
菰巻いて天辺にゐる鴉かな	曉子
栗の枝切りて生家の冬支度	すみれ
山茶花の垣根の奥に伯母の住む	美耶
八つ手咲きいつも子どもの通る道	知佳子
あかつきに人影動く冬菜畑	森口良樹
獅子舞の門門に人立ってをり	宮田保江
綿虫を波打ち際に見失ふ	山野ウタ
北の山あたりの晴れて初時雨	大橋博子
庵へと続く小道の藪柑子	熊谷ゆり子

森口良樹 私の選んだ十句

芸北の雪のまばらに冬初め	佐保光俊
埤へと川鶺鴒飛び立つ冬の暮	秋沙
裏庭に音立てて降る冬の雨	あざみ
初雪とやうやく気づく宿の朝	栄吉
畑返すあたりに水と根の匂ひ	新庄憲彦
夕星や大根引いて畑あがる	友岡案山子
冬椿一輪咲いて日のあたる	美耶
裏庭に斑に解けて霜の花	山野ウタ
寒椿添へて輪島の漆器展	英一
冬の空見上ぐればなほ雲低く	かこ